

ソーシャル・ウェルビーイング研究センター

社会知性開発

研究センター



アジア各国でウェルビーイング(幸福)に関する国際比較調査を行うとともに、国際的な研究コンソーシアムの構築を目指す社会知性開発研究センター(ソーシャル・ウェルビーイング研究センター)の国際コンファレンスが11月23日から25日まで3日間の日程で開催され、延べ151人が参加した。

前年の2日間は生田キャンパスで研究者によるアカデミックミーティングが行われ、原田博夫研究代表(経済学部教授)、佐々木重人学長のあいさつ後、日本、韓国、台湾、モンゴル、ベトナム、タイ、フィリピン、インドネシアのコンソーシアムメンバーによる発表・議論が行われた。最終日の25日は神田キャン

パスで公開シンポジウムとして行われ、「アジアにおける『豊かさ』の新しい形」をテーマに基調講演のほか、各国研究者による報告がなされた。開会に先立ち、原田代表、日高義博理事長からあいさつがあった。原田代表は前身の社会関係資本研究センター(2009年〜13年)から続く活動を振り返り、「各国とのネットワークを築くことができ、8カ国90人の研究者が関与するプロジェクトとなつた。収集した膨大なデータはWEB上で公開する。次代を担う研究者によって、次に何をやってほしい」と話した。

総合司会は金井雅之人間科学部教授が担当。基調講演では大阪大学大学院経済学研究科の大竹文雄教授と星槎大学の細田満和子副学長・教授の

8カ国の研究者が調査結果報告

国際コンファレンス

アジア各国でウェルビーイング(幸福)に関する国際比較調査を行うとともに、国際的な研究コンソーシアムの構築を目指す社会知性開発研究センター(ソーシャル・ウェルビーイング研究センター)の国際コンファレンスが11月23日から25日まで3日間の日程で開催され、延べ151人が参加した。

開会に先立ち、原田代表、日高義博理事長からあいさつがあった。原田代表は前身の社会関係資本研究センター(2009年〜13年)から続く活動を振り返り、「各国とのネットワークを築くことができ、8カ国90人の研究者が関与するプロジェクトとなつた。収集した膨大なデータはWEB上で公開する。次代を担う研究者によって、次に何をやってほしい」と話した。

その後、日本以外の各国研究者7人による報告がなされた。原田代表、嶋根克己人間科学部長・教授の進行で登壇者9人によるパネルディスカッションでは、今後のアジア社会における豊かさを考える上で興味深い意見が交わされた。

社会知性開発研究センター/古代東ユーラシア研究センター(研究代表 飯尾秀幸文部科学省)の今年度2回目のシンポジウム「東ユーラシア地域論の現在―交流・交易からみた北と南―」が11月17日、神田キャンパスで開かれた。古代中国の辺境統治、北部ベトナムの陶磁器貿易、9〜12世紀のアイヌの交易や日宋貿易について歴史学や考古学の研究者4人が講演し175人が聴き入った。

東京大学大学院博士課程・日本学術振興会特別研究員Dの新津健一郎氏は、後漢時

代に中国南部から北中部ベトナムにかけて存在した監察行省「交州」の社会状況について報告した。

人間文化研究機構総合情報発信センター研究員の菊池百里子氏は、13〜15世紀の北部ベトナムの陶磁器貿易を、自身が参加した発掘調査の写真を紹介しながら「海城アジア」という視点で説明した。

北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授の篠島栄紀氏は、9世紀に秋田城で展開された北海道アイヌの朝貢交易を取り上げた。ヒグマなどの毛皮類が珍重され、オホ



アジア産業研究センター

異文化がもたらすビジネス課題

ハノイで国際シンポジウム

社会知性開発研究センター/アジア産業研究センター(研究代表 小林守商学部教授)は、11月3日に国民経済大学ビジネススクールと共催で国際シンポジウムをベトナムのハノイで行った。

国民経済大学ビジネススクールと本学商学研究所は2011年に国際交流組織協定を結んでおり、15年に大学間協定に発展した。

シンポジウム開催に先立ち、小林代表から同大学ビジネススクールとのこれまでの関わり、本シンポジウムの趣旨説明がなされた後、内野明商学部教授の司会のもと、講演として、ビジネスにおける文化の違いについて三つの視点で報告がなされた。

まず上田和勇商学部教授がベトナムの事例に基づくビジネスにおける異文化リスクのマネジメントの視点で、次に国民経済大学トラン・チ・ハン・ホア副学長らがベトナムの大学と日本企業との知識移転のあり方の視点で、最後に国民経済大学レ・チ・ラン・フン准教授らがベトナムにおける企業の知的資本のあり方の視点で報告を行った。

パネルディスカッションでは、司会を内野教授、コーディネーターを小林代表が務め、パネリストには上田教授、トラン・チ・バン・ホア副学長、レ・チ・ラン・フン

2人が登壇した。格差や労働などの視点から幸福度について研究する大竹教授は「相対所得、相対意識と幸福度」をテーマに幸福度に関するアンケートの結果を読み解き、「ソーシャルキャピタル(社会関係資本)が高い人、地域ほどウェルビーイング度が高い」と論じた。

細田教授は「幸せの国」と呼ばれるアータンを取り上げ、「ウェルビーイングのためのレッスン・アータン」をテーマに講演した。

古代東ユーラシア研究センター 東ユーラシア地域論の現在



シンポジウム 4研究者が講演

社会知性開発研究センター/古代東ユーラシア研究センター(研究代表 飯尾秀幸文部科学省)の今年度2回目のシンポジウム「東ユーラシア地域論の現在―交流・交易からみた北と南―」が11月17日、神田キャンパスで開かれた。古代中国の辺境統治、北部ベトナムの陶磁器貿易、9〜12世紀のアイヌの交易や日宋貿易について歴史学や考古学の研究者4人が講演し175人が聴き入った。

東京大学大学院博士課程・日本学術振興会特別研究員Dの新津健一郎氏は、後漢時

代に中国南部から北中部ベトナムにかけて存在した監察行省「交州」の社会状況について報告した。

人間文化研究機構総合情報発信センター研究員の菊池百里子氏は、13〜15世紀の北部ベトナムの陶磁器貿易を、自身が参加した発掘調査の写真を紹介しながら「海城アジア」という視点で説明した。

北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授の篠島栄紀氏は、9世紀に秋田城で展開された北海道アイヌの朝貢交易を取り上げた。ヒグマなどの毛皮類が珍重され、オホ

准教授が参加し、日本とベトナムのビジネスにおける文化の違いがもたらす課題とその解決方法のあり方について議論した。

なお、本シンポジウムでは、14年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に採

択された「メコン諸国における経済統合の中小企業への影響についての研究―ASEAN サプライチェーン」の観点から「プロジェクトがこれまでの5年間実施したメコン地域5カ国(タイ、ミャンマー、ベトナム、ラオス、カンボジア)の調査結果報告もなされた。

12月15日(土)には、山口県下関市の東亜大学ASEANセンターと共催でシンポジウムを開催する予定。(岩尾詠一郎商学部教授)

歴史や考古学に興味を持つ多くの聴講者

ゼミ生と談笑する柳教授(右)



柳ゼミ 資格試験合格目指す

柳ゼミでは、税法・税務会計の理論と実践を学ぶ。税理士、公認会計士、国税専門官、公務員などを目指している学生が多いのが特徴。ゼミ生は現在37人。ゼミ長の「大沼翔さん(4年次)も公務員(東京都港区職員)に内定した。



柳教授は「会計学科は、税理士・公認会計士をはじめ多くの有為な人材を輩出し、実業界・教育界において高く評価されている。学生たちの資格試験合格などの目的達成、将来を見据えた教育・研究に積極的に取り組んでいる」と語った。

5年間で通算9回開催のシンポジウムに皆動した2人の参加者に、荒木敏夫名誉教授から記念品が贈られた。



今月号は「ゼミナル教育」がテーマ。特徴ある活動を行っている柳裕治ゼミを取り上げる。